

2023 年度 卒業論文へのコメント

牲川 波都季

<p>掛水 南帆</p> <p>今の企業が求める人材像とは</p> <p>南帆さんは4年生春学期までは人間関係の作り方に関連するテーマに興味をもってきました。他者に積極的に語りかけていけない自分の性格に、問題を感じていたようです。その後、就職活動などで、他者の話をまずじっくり聞く自分のコミュニケーション・スタイルの長所にも気づきました。そして卒業論文では、企業が求めるコミュニケーション能力にテーマを絞り、出身地四国の上場企業の採用広告の分析と、親族へのインタビュー調査を行いました。前者の分析からは、コミュニケーション能力に直接言及している企業は実は少ないということがわかりました。インタビュー調査からは、企業活動においてコミュニケーション能力をもつことは前提であり、就職後には交渉力が必要と語られていました。では一体、「コミュニケーション能力」や「交渉力」は何を指すのか。新たな疑問を生む論文です。</p>	<p>p.1</p>
<p>楠 成実</p> <p>働きやすさを作る</p> <p>成実さんは長らく同じアルバイト先に勤めてきました。アルバイト先で客と関わることも多く、事件といえるような迷惑行為にもあってきたとのこととです。進級論文では、こうした迷惑行為が日本固有の問題である可能性があるとして、韓国の同種の職業での働き方との比較を試みました。卒業論文でも同じ問題意識から、体験した迷惑行為を具体的に記述したのち、主に『職場のウェルビーイングを高める』という本を詳細にまとめ、本の提案を成実さん自身に当てはめて、自分であればどのように実現できるかを述べました。本の冒頭には、1950年代の、肉体労働に携わりつづけていることが長生きの秘訣だという調査結果の紹介がありました。では現代の職場や生活はどうあるべきなのでしょう。成実さんが「自分ができること」として述べた部分にヒントがありそうです。</p>	<p>p.23</p>

<p>谷内 友美</p> <p>記号化されたコミュニケーションによるプレイヤー間の意思疎通についての考察</p> <p>友美さんは、複数人が協力して対戦するオンライン・ゲームを対象に、意思疎通の仕組みを明らかにしました。プレイヤー同士は初対面で、属性や経験時間が異なる場合も少なくありません。またこのゲームで、意思疎通のための言語的手段は「定型文チャット」のみです。この制限のもと、プレイヤーたちはどのように目的遂行を図るのか。友美さんは、実際のゲームのシーンを視覚的に提示するとともに、文章で丁寧に説明し、意思疎通の成功・失敗の様子を説得的に描き出しました。結論では、ゲームのルールに熟知しつつ、「場の状況」を読み取る力の重要性を指摘しました。こうした経験・能力は、プレイヤーの性別や出身、使用言語と無関係に行使され、友美さんはこのゲーム空間を「平等なコミュニケーション空間」と呼びました。こうした空間の「実在」が、現実世界をも変えていく予感します。</p>	<p>p. 42</p>
<p>谷原 妙</p> <p>被雇用者が長期的なキャリアを形成するためには —複線経路等至性アプローチを用いたキャリア分析—</p> <p>妙さんは進級論文ではオンライン授業の改善をテーマとしていました。COVID-19 流行下で自分が受けた授業と塾で教えた経験をきっかけとして始めたもので、調査結果を将来の仕事に活用したいとのことでした。妙さんの関心が仕事にあることがはっきりしてきたため、卒論では仕事を長く続けるための要件を探ることになりました。キャリアを続けてきた 2 名にインタビューし、結果を TAM という質的研究手法で分析しました。働きつづける間には、異動や転勤、転職といった大きな出来事が起こります。そうした出来事は、周囲の働きかけに応じるという受容性と、自分の希望にそぐう状況を選択していく積極性とのいずれかで通過されていました。応じ選んで行く個々の営みは、社会制度の変化や構築にも寄与するのでしょうか。妙さんにぜひ考え続けてほしいと思います。</p>	<p>p.66</p>

<p>譚 昕</p> <p>中国映画市場における映画とファン同士の繋がり</p> <p>譚さんの研究によれば、中国では、人気映画に対しファンが自主上映会を開いたり、関連グッズを用意し交換しあうといった、ファン・ミーティング活動が盛んだそうです。この活動は、特定のファンがボランティアで始め、SNSで他のファンたちもつながっていき、やがて映画館を借り切った自主上映イベントの開催へと至ります。初上映から間もない時期に始められ、映画館との交渉次第で入場料が変わるなど、日本の映画界では想像しにくい内容です。譚さんの調査によれば、近年の中国映画の質は下がっているとのことですが、海外制作映画も含め、魅力的な一つの作品を他者とともに味わいつくすという新たな楽しみ方が見つけられているようです。こうした人々の動きは、中国社会で常に起こってきたことなのでしょうか。刺激的なテーマです。</p>	<p>p. 85</p>
<p>東原 野案</p> <p>ネガティブ志向からポジティブ志向へ変えていくには</p> <p>野案さんの進級論文と卒業論文は、野案さんにとって理想的な身近な他者にインタビューし、よりよい自分の生き方を見つけようとしてきた点で共通しています。進級論文は「美」とは何か、卒業論文ではどうすれば「ポジティブ志向」でいられるのかを探りました。インタビューの結果からは、野案さんがインタビュー어의答えを受け、そこから生まれた新たな疑問を次々と投げかけたことがうかがえます。いずれの論文でも納得できる結論が得られたようですが、これも野案さんに、生身の人間の存在とことばから何か導き出せるという、強い信念があったからではないでしょうか。周りの環境や個人の心の持ち方が重要だという卒論の結論も、この信念と結びついているように思います。これからも他者に問いかけながら、自分にとっての課題と答えを探しつづけてください。</p>	<p>p.98</p>

<p>福田 卓</p> <p>”ギャンブル”から身を引くには</p> <p>卓さんは、ギャンブル依存者からの回復をテーマとし、自らが強いきっかけもなく一時期パチンコに夢中になった経験から、そこから離れた自分と離れがたい同世代の友人とを比較しました。卓さんは、就職活動に取り組む中でギャンブルが意識にのぼらなくなり、関心を失ったということです。それに対し2名のインタビューは、ギャンブルに対し強いロマンを抱き、ギャンブルをしている自分に輝きを見出していました。卓さんは、無理にギャンブルから引き離すと反動が起こってしまうので、今は夢中になるのもよい、他者を傷つけることがないように願っているとして、安易には解決策を提案しませんでした。そして自らは、ギャンブル以外の楽しみを続けていきたいと結論づけました。長い人生を大過なく送ることは難しいことですが、優しさをもって一歩ずつ進んでいってほしいと願っています。</p>	<p>p.113</p>
<p>藤田 晴可</p> <p>コレクターのグッズ収集の実態と心理—大学生女性に焦点を当てて</p> <p>晴可さんはキャラクター・グッズの収集家で、その趣味を生かして卒論を書きたいと望んでいました。ゼミには、「推し」のグッズを集めるという人は複数いましたが、特定のキャラクターの物を集めるという人はほとんどいませんでした。晴可さんが事例として取り上げたのは、ポケモン・グッズ収集の自分自身、LEGO 収集のAさん、ディズニー・グッズ収集のBさんの3名で、全員大学生の女性でした。先行研究では、女性はマスコットキャラクター・グッズを見て「かっこいい」「ときめく」といった一種の高揚感をもつとされていましたが、晴可さんの調査からは、物自体から安心感を得る、その物につながる人物や場所を思い出すといった楽しみ方もあることがわかりました。いわゆる「蒐集」とは異なるコレクターの生活世界を、人々の声から生き生きと知ることのできる論文です。</p>	<p>p.130</p>

<p>古屋 歩</p> <p>温泉施設・サウナをより広めるためには</p> <p>私のゼミでは喜怒哀楽と結びついたテーマ選択を勧めています。歩さんは楽しみとして利用してきたサウナを選びました。ただ、当初はそのテーマにオリジナリティを見いだせない様子でした。私にとっては、大学生が心身の疲れをとるために、日常的に温泉施設を利用すること自体が、とても特別に思えます。多様な要件が重なって初めて可能になるからです。歩さんには、温泉施設に長時間はりついて、客層や利用方法を実地で観察してもらいました。その結果、若年層の利用者は少なく、特に女性の一人での利用者が少なかったことがわかりました。なぜ男性はひとりでサウナに来るのか、または来られるのか、歩さんのもつ周囲への観察力を活かして検討を続けてほしいと思います。5.2.3の歩さん自身の楽しみ方の描写は、自分もそこにいるかのように感じさせてくれる文章です。</p>	<p>p.149</p>
<p>山下 那南</p> <p>性的マイノリティに対するマイクロアグレッションを防ぐ ーライフストーリー・インタビューを通してー</p> <p>那南さんは、マイノリティにマイクロアグレッションをしてきたのではないかという反省と、これからは防ぎたいという思いから研究を始めました。そして、ライフストーリー・インタビューという研究方法で、性的マイノリティ当事者にこれまでの人生を少しずつ尋ね、マイノリティであることに関する経験や認識の様相を明らかにしました。幼少時から現在のパートナーと会うまでの苦勞と喜び、住宅ローンを組む際のパートナーシップ制度の効果、性的マイノリティのアクセサリー的なドラマでの扱われ方の問題など、私も多くのことを知りました。那南さんが聞きとった語りそのものが貴重です。他者を完全に理解することは不可能だという前提が、マイクロアグレッションを防ぐという結論、教育という他者の心に関わる仕事に就く者として、私も深く心に留めておきたいと思います。</p>	<p>p.163</p>

<p>山田 茜 東京ディズニーリゾートの地方顧客の新規獲得やリピートのための施策</p> <p>茜さんの進級論文は、日本のアイドルの海外進出推進策を、K-POP をヒントに提案するというものでした。卒業論文では、ディズニーリゾートを対象に、関東圏以外からの顧客を引き付ける戦略について明らかにしようとしていました。行きたいと思わないという2名と、比較的行きたいと望んでいる1名にインタビューしたところ、関西圏でのユニバーサル・スタジオ・ジャパンの存在の大きさ、子ども向けで人混みがひどいというイメージという課題が浮かび上がりました。費用をかけても行きたいと思えるようなイメージづくり、費用を抑えるキャンペーン、人込みを避けるパスの利用法の宣伝など、茜さんは具体的な解決策を示しました。現在の茜さんにとって、アイドルもディズニーリゾートもとても大切なものです。そのことが、先行研究の分析を含め、説得力のある論文内容を可能にしました。</p>	<p>p.187</p>
<p>山中 亜美 長続きするアイドルグループとは</p> <p>亜美さんは、NCT127というK-POPグループのファンであり、そのグループが長続きするのか心配だということで研究を始めました。兵役のためにメンバーの出入りがあるということぐらいしか、私自身は知りませんでした。亜美さんによれば、それ以外に、7年ごとの契約更新ルール、多数のライバルの存在が解散危機を招く要因としてあるそうです。それを乗り越え、長くグループが続いていくための条件は何か。この疑問に答えるため、亜美さんはSUPER JUNIORら、4つの長寿グループを取り上げ、メンバーのインタビューやライブ時の発言をデータとして分析しました。最終的には3つの要因にまとめられましたが、その結論以上に、4つの事例分析の箇所が魅力的です。グループメンバーの発言が丹念にたどられており、卒論を執筆してきたプロセス全体への喜びが伝わってきます。</p>	<p>p.203</p>